『南山神学』36 号（2013 年 3 月）pp. 163-189.

「分離した魂は個々のものを認識するか」

―トマス・アクィナス『定期討論集 魂について』第 20 問題 翻訳と註―

井上　淳

＜翻訳と註＞

第 20 問題では [1]，分離した魂が個々のもの（singularia）を認識するか否かが問われる。そして〔その答は〕否であるようにも思われる。なぜなら，

---

[1] 本訳は Leonina 版，すなわち，B. C. Bazan ed., *Sancti Thomae de Aquino Opera Omnia iussu Leonis XIII P.M. edita,* Tomus XXIV-1, *Quaestiones Disputatae de Anima* (Roma: Commissio Leonina, 1996) を底本とし，註の多くもこの版に依拠した。しかし次の二つの版も常に参照し，Leonina 版と異なる場合にはそれを註記した。ただし綴りの違いなどの，さほど重要ではないと思われる異同については一々註記しなかった：James H. Robb, ed., *St. Thomas Aquinas Quaestiones de Anima* (Toronto: Pontifical Institute of Mediaeval Studies, 1968); M. Calcaterra and T.S. Centi ed., *Quaestio Disputata de Anima* in *Quaestiones Disputatae*, vol. 2, 10th edition (Turin: Marietti, 1965). 以降 Robb 版および Marietti 版と略記する。また，翻訳にあたっては，以下の現代語訳を参照した。John P. Rowan, *The Soul: A Translation of St. Thomas Aquinas' De Anima* (St. Louis: Herder Book Co., 1951); St. Thomas Aquinas, *Questions on the Soul*, trans. James H. Robb (Milwaukee: Marquette University Press, 1984); Saint Thomas d'Aquin, *Questions disputées de l'âme*, introduction, traduction et notes par Jean-Marie Vernier (Paris: L'Harmattan, 2001). 以降 Rowan 訳，Robb 訳，および Vernier 訳と略記する。Rowan 訳は Marietti 版を用いた翻訳，Robb 訳は本人の校訂版を用いた翻訳，Vernier 訳は Leonina 版を用いた翻訳である。

なお，本稿で用いるトマス・アクィナスの著作とその略号は次の通りである。Quaestiones disputatae de anima (QDA), Quaestiones disputatae de veritate (QDV), Sententia Libri De anima (In De anima), Scriptum super libros Sententiarum (SSS), Summa theologiae (ST), Summa contra Gentiles (SCG). テキストは SSS に Mandonnet-Moos 版と Parma 版を，SCG に Marietti 版を用いた他は全て Leonina 版を用いた。

【異論】

(1) 魂の諸能力のうち，分離した魂の内に残るのは知性（intellectus）のみである。しかるに，知性の対象は普遍的なものなのであって，個々のものではない。と言うのも,『デ・アニマ』第一巻に述べられているように[2]，個々のものに関わるのは感覚であり，学知（scientia）は普遍的なものに関わるのだからである。それ故，分離した魂は，個々のものを認識せず，ただ普遍的なもののみを認識するのである。

(2) 更に。もし分離した魂が個々のものを認識するのだとすれば，それは，身体の内に在る間に前もって獲得した諸形相によって認識するか，あるいは〔神の光に基づいて〕流入された諸形相によって認識するか[3]，そのどちらかである。しかるに，分離した魂は，前もって獲得した諸形相によって認識するのではない。と言うのも，身体の内に在る間に感覚を通して獲得する諸形相のうち，あるものは個別的諸観念（intentiones indiuiduales）であるが，これらは感覚的な部分の能力の内に保存されるものであり，それ故，分離した魂の内に存続することはできないからである。既に明らかにされたように[4], そのような能力は分離した魂の内に存続しないのである。また，あるものは普遍的諸観念（intentiones uniuersales）であり，これらは知性の内に存在するものである。それ故，これらのものだけが分離した

QDA, q. 20 の平行箇所は *SSS* IV, d. 50, q. 1, a. 3; *QDV*, q. 19, a. 2; *SCG* II, c. 100; *ST* I, q. 89, a. 4，参考箇所は *SSS* II, d. 3, q. 3, a. 3 (Utrum angeli intelligant particularia); *QDV*, q. 8, a. 11 (Utrum angelus cognoscat singularia); ST I, q. 86, a. 1 (Utrum intellectus noster cognoscat singularia)である。このうち邦訳が出版されているものは次の通りである。*ST* I, q. 86 et 89, 大鹿一正訳『神学大全』6（創文社，1969 年）；*QDV*, q. 19, 山本耕平訳『聖カタリナ女子大学紀要』第 15 号（聖カタリナ女子大学，2003 年）；*QDV*, q. 8, 山本耕平訳『人間文化研究所紀要』第 12 号（聖カタリナ大学人間文化研究所，2007 年）。

[2] Aristoteles, *De anima* II, 417b22-23, 27-28.

[3] Cf. *ST* I, q. 89, a. 7, cor.:「分離された魂は，むしろ形象の「神の光に基づく流入」によって個々のものを知性認識するのである」（大鹿一正訳）。

[4] *QDA*, q. 19.

魂の内に存続することができる。しかしながら，普遍的諸観念によって個々のものが認識されることはできない。従って，身体の内において獲得した諸形相によって分離した魂が個々のものを認識することは不可能である。同様にまた，流入された諸形相によって認識することも不可能である。なぜなら，そのような形相は個々のもの全てに均等に関係づいているのであるから，その帰結として，分離した魂は個々のもの全てを認識するということになってしまう[5]。これが真であるとは思えない[6]。

(3) 更に。分離した魂の認識は，場所的な隔たりによって妨げられている。と言うのも，アウグスティヌスが『死者のために払われるべき配慮について』の中で[7]，死者たちの魂はこの世で起きている事柄を全く知ることができない所にいる，と言っているからである[8]。しかしながら，流入された諸形象によって生じる認識を，場所的な隔たりが妨げるわけはない。それ故，分離した魂は，流入された諸形象によって個々のものを認識するのではない。

(4) 更に。流入された諸形象は，現在と未来に同等に関係づいている。なぜなら，可知的諸形象の流入は時間の下にあるのではないからである。それ故，もし分離した魂が流入された諸形象によって個々のものを認識するのであれば，現在や過去のことだけでなく未来のことも認識するはずであるが，それは不可能だと思われる。未来のことを知るのは，ただ神に

---

[5] Leonina 版と Marietti 版は sequeretur，Robb 版は sequitur.

[6] Cf. *QDV*, q. 19, a. 2, arg. 1:「離在的魂が個々のものを認識するとすれば，それは魂と一緒に創造された形象によってか，或いは獲得された形象によってかのいずれかである。ところで，獲得された形象によってではない。何故なら，魂の知性的部分には個的な形象ではなく，普遍的な形象が受けとられる。〔中略〕同様に，魂と一緒に創造された形象によってでもない。何故なら，個々の事物は無限にあるのであるから，その場合には離在的魂のうちに無限の形象が同時に創造されている，と措定しなければならないことになろう。しかし，これは不可能である」（山本訳）。

[7] Augustinus, *De cura pro mortuis gerenda*, c. 13 (PL, 40, 605).

[8] Cf. *ST* I, q. 89, a. 7, arg. 1

のみ固有のことなのであるから[9]。と言うのも，『イザヤ書』41 章にこう書かれている[10]。「未来に起きることを告げてみよ，そうすれば我々は，あなた方が神であることを認めるだろう。」[11]

(5) 更に。個々のものの数は無限である[12]。しかしながら，流入される諸形象の数は無限ではない[13]。それ故，分離した魂が流入された諸形象によって個々のものを認識することは不可能である。

(6) 更に。不分明なもの（indistinctum）が判然たる認識の根源であることはできない。しかるに，個々のものの認識は判然たる認識である。従って，流入された諸形相は，それらが普遍的なものである以上，不分明なものなのであるから，分離した魂が流入された諸形象によって個々のものを認識することはできないように思われる[14]。

(7) 更に。何かの内に受け取られるものは全て，受け取る側の様態に従ってその内に受け取られる[15]。しかるに，分離した魂は非質料的である。それ故，流入される諸形相は，非質料的な仕方で分離した魂の内に受け取られる。

---

[9] Cf. *QDV*, q. 8, a.12, s. c. 1:「未来のことがらを知ることは神性のしるしである」（山本訳）。

[10] Prophetia Isaiae, 41, 23.

[11] Leonina 版は in futurum, et dicemus quia dii estis uos, Robb 版と Marietti 版は in fine, et dicam quod dii estis vos.

[12] Cf. *QDV*, q. 8, a. 12, arg. 13:「ところで，個的なものは可能的には無限である。このことは，もし世界が将来にずっと存続すると主張されれば，―こうしたことは明らかに神の能力のうちにある―きわめて明白である」（山本訳）。

[13] Cf. *QDA*, q. 18, arg. 7: ". . . et sic, cum indiuidua sint infinita, sequetur quod in anima separata sint similitudines infinite; quod uidetur impossibile."（それ故，個体の数は無限なのであるから，分離した魂の内に無限の数の似姿が存在するということになるが，それは不可能であると思われる）。

[14] Cf. *QDV*, q. 19, a. 2, arg. 2:「不分明な形象は明瞭な認識の根原でありえない。ところが，普遍的な形象は不分明であるが，個々のものの認識は明瞭な認識である。それ故，普遍的な形象によって離在的魂が個々のものを認識することはできない」（山本訳）。

[15] Cf. *In De anima*, II, 12, Leonina, u. 74-76; *QDV*, q. 24, a. 8, arg. 6:「さらに，『原因論』(Comm. 10 (9) et 12 (11)）に言われている通り，或るもののうちに在るものは，自らがそのもののうちに在るそのものの仕方によってそのもののうちに在るのである」山本耕平訳『研究所紀要』第 13 号（聖カタリナ大学キリスト教研究所，2010 年）。

しかしながら，非質料的なものは，質料によって個体化されたものであるところの個々のものの認識の根源ではあり得ない。それ故，分離した魂が流入された諸形相によって個々のものを認識することは不可能である。

(8) ところが〔この論に対して〕，流入された諸形相は非質料的なものであるけれども，それらによって個々のものは認識され得る。なぜならそれらは，神がそれによって普遍的なものも個々のものも認識するところのイデア的諸理念（rationes ydeales）の似姿なのであるから[16]，という意見が出された。――それに対する反論。神はイデア的諸理念によって個々のものを認識するが，それは，それらが個体化の根源であるところの質料を作出するもの（factrices）である限りにおいてである。しかるに，分離した魂が有する流入された諸形相は質料を作出するものではない。なぜなら，それらは創造するもの（creatrices）ではないからである。創造を行うのはただ神のみである[17]。それ故，分離した魂が流入された諸形相によって個々のものを認識することは不可能である。

(9) 更に。被造物の神への類似性は，同名同義によってではあり得ず，ただ類比によって（per analogiam）であるのみである[18]。しかるに，類比による類似性によって得られる認識とは，極めて不完全なものである。たとえば，或るものが，どちらも「存在するもの」であるという点が一致しているだ

---

[16] 「イデア的諸理念」（rationes ydeales）については山田晶訳『神学大全』3（創文社，1987年）の註 241 を参照：「ratio idealis とは，神がそれにもとづいて万物を創造する原型として，事物の存在するに先立って神の御言のうちに先在すると考えられた万物のイデアである。」

[17] 創造する（creare）ということが神にのみ固有なはたらきであることについては *ST* I, q. 45, a. 5 を，神の認識する全てについてイデアが存在するということについては *ST* I, 15, a. 3 を参照。

[18] Cf. *ST* I, q. 4, a. 3, ad 3:「被造物の神に対する類似性が存在するといわれるのは，同一の類的な乃至は種的な本性に従っての形相的共通性 communicantia in forma のゆえではなく，単なる，アナロジアに従っての形相的共通性，即ち，神は本質による有であり神以外のものは分有による有であるという共通性のゆえである」高田三郎訳『神学大全』1（創文社，1987 年）。

けの他のものによって知られる場合のように。それ故, もし分離した魂が, 流入された諸形象によって，それらがイデア的諸理念に類似している限りにおいて，個々のものを認識するのだとすれば，分離した魂は極めて不完全な仕方で個々のものを認識するのではないかと思われる。

(10) 更に。先になされた論証において [19]，分離した魂は，流入された諸形相によって自然的なるものを，ある混雑した，また普遍的な仕方でしか認識することができないと述べられた。しかしこれは，個々のものを認識することではない。従って，分離した魂は，流入された諸形象によって個々のものを認識するのではない。

(11) 更に。魂がそれによって個々のものを認識するとされている，その流入された諸形象は，神によって直接的な仕方で原因されるものではない。なぜなら，ディオニシウスによれば，最下位のものを中間のものを通して実現にもたらすのが神性の法（lex diuinitatis）なのだから [20]。しかしまた，それらは天使によって原因されるものでもない。なぜなら，天使はこのような形象を原因することができないからである。と言うのも，天使はこのような形象を創造によって原因することはできない。天使はいかなる事物の創造者でもないからである。また，天使はこのような形象を移し変えによ

---

[19] *QDA*, q. 15, cor.; q. 18, cor.

[20] Pseudo-Dionysius Areopagita, *De ecclesiastica hierarchia*, 5, 4; *De coelesti hierarchia*, 4, 3:「というのも，その律法は万物の超存在的な秩序の根源によって，単に上位の知性と下位の知性についてだけではなく，同じ階級の知性においても，それぞれの位階ごとに第一と，中間と，最後の諸階級，諸力が存在するように定められたのであり，また，下位の者たちに対して神への接近，神からの照明，神との交わりのためのより神に近い教示者と導き手が存在するようにと定められたのだからである」今義博訳「天上位階論」『中世思想原典集成』3（平凡社，1994 年）。Cf. *ST* II-I, q. 63, a. 3, arg. 1:「二次的原因 causa secunda によってなされうることがらは, 時としておそらく奇跡的に miraculose なされるのを除けば, 神によって直接・無媒介的に immediate なされることはない。なぜならディオニシウスが『天上階序論』第四章においてのべているように，「究極のことども ultima を中間のもの media を通じて実現にもたらすのが神性の法 lex divinitatis である」から」稲垣良典訳『神学大全』11（創文社，1987 年）。

って（transmutando）原因することもできない。なぜなら，そのためには何らかの運ぶ媒体（medium deferens）がなければならないからである[21]。それ故，分離した魂は，それによって個々のものを認識するための，流入された諸形象など持っていないように思われる。

(12) 更に。もし分離した魂が流入された諸形象によって個々のものを認識するのだとすれば，それは，それらの諸形象を個々のものに適用することによってか，あるいはそれらの諸形象自体に自らを向けることによってか，この二通り以外にはあり得ない。さて，もし個々のものに適用することによってであるならば，このような適用が個々のものから何かを受け取ることによってなされるのでないことは明らかである。なぜなら，個々のものから形象を受け取るために生まれつき備わっていた感覚的能力を，分離した魂は持っていないのであるから。従って残されているのは，個々のものに関して何かを仮定することによってこの適用がなされるという仕方である。だが，これでは，魂は個々のものそのものを認識するのではなく，単に個々のものに関して仮定していることを認識するに過ぎないのである。一方，もし魂が流入された諸形象自体に自らを向けることによって個々のものを認識するのであれば，それらの諸形象自体の内に在る限りの個々のものをしか認識しないということになるであろう[22]。だが，それらの諸形象の内

---

[21] Cf. *SSS* II, d. 9, q. 1, a. 2, arg. 6: “Praeterea, si unus illuminat alium, aut hoc facit creando novum lumen in mente ejus, aut transmutando lumen a Deo receptum. Sed primum est haereticum, cum Angeli non sint creatores. Secundum autem videtur impossibile, nisi ponatur aliquod medium deferens, sicut in illuminatione corporali: quod ibi non est etiam facile fingere. Ergo videtur quod unus alium non illuminet.”（更に，もし一人の天使が他の天使を照明するのであれば，それは新しい光をその天使の精神の内に創造することによってそれをなすか，あるいは神から受け取った光を移し変えることによってそれをなすかのどちらかである。しかしながら，前者は異端的である。天使は創造者ではないのであるから。後者は，物体的照明におけるごとく何らかの運ぶ媒体が措定されるのでない限り，不可能であるように思われる。この点でまたこのことも想定し難い。それ故，一人の天使が他の天使を照明することはないように思われる）。

[22] Leonina 版と Marietti 版は sequetur，Robb 版は sequitur.

には，個々のものは普遍的な仕方で（uniuersaliter）しか存在しない。それ故，分離した魂は，普遍的な仕方でしか個々のものを認識できないのである[23]。

(13) 更に。有限なものは決して無限なものに及び得ない[24]。しかるに，個々のものは無限である。それ故，分離した魂の力は有限なのであるから，分離した魂は個々のものを認識できないと思われる。

(14) 更に。分離した魂は「知性的な直視」（uisio intellectualis）によることなく何かを認識することはできない。しかるに，アウグスティヌスが『創世記逐語注解』第 12 巻に述べているように[25]，物体も〔物体の〕似姿（similitudines）も[26]，知性的な直視によっては認識されない。それ故，個々のものは物体なのであるから，それらは分離した魂によって認識され得ないと思われる。

(15) 更に。同一の本性があるところには，同一のはたらきの仕方がある。しかるに，分離した魂は，身体と結合した魂と同一の本性を有している。それ故，身体と結合した魂が個々のものを知性によって認識することができないのであるから[27]，分離した魂もまた，認識することができないように思われる。

---

[23] Leonina 版と Marietti 版は cognoscit，Robb 版は cognoscet.

[24] Cf. Aristoteles, *Physica*, 266a23-24.

[25] Augustinus, *De Genesi ad litteram*, 12, 24, 51:「だから同じ魂のうちにも様々な視像が生じる。あるいは身体を通して感じられるもの，例えば物体的天空や大地やそのうちに在ると知られうるものである。あるいは物体の類似物で霊によって見られるものである。これについてはすでに多くのことを述べてきた。あるいは精神によって知解されるものであり，これらは物体でも物体の類似物でもない」片柳栄一訳『アウグスティヌス著作集』17（教文館，1999 年）。

[26] Leonina 版と Marietti 版は neque corpora, neque similitudines, Robb 版は neque corpora neque similitudines corporum.

[27] Cf. Aristoteles, *Analytica postariora* I, 81b6:「個々のものを知るものは感覚である」加藤信朗訳「分析論後書」『アリストテレス全集』1（岩波書店，1971 年）

(16) 更に。能力はその対象によって区別される。しかるに，それによってものがしかじかであるところのそれは，より一層しかじかである（Propter quod unumquodque, et illud magis.）[28]。従って，対象は能力よりもより一層はっきりと区別される。しかるに，感覚が知性になることは決してない。それ故，「可感的なもの」である個物が「可知的なもの」になることは決してないのである。

(17) 更に。上位の階層の認識能力は，同じ認識可能なことがらに対して，下位の階層の認識能力よりも多数化がより少ない。実際，共通感覚（sensus communis）は，五つの外的感覚によって捉えられるものを，それ一つで全て認識することができるのである[29]。同様に天使は，一つの認識能力，即ち知性によって，「普遍的なもの」と「個々のもの」を両方とも認識する。このそれぞれを人間は，知性と感覚によって捉えるのである。下位の階層の一つの能力は，それと区別された他の能力が捉えるものを決して捉えることができない。たとえば，視覚は聴覚の対象を決して捉えることができない。それ故，人間の知性は，感覚の対象である「個々のもの」を決して捉えることができないのである[30]。天使の知性は両方を認識するのであるが。

---

[28] Cf. Aristoteles, *Analytica posteriora*, 72a29-30:「何となれば，それぞれの事物〔甲〕が〔何ものかについて〕そのもの〔乙〕にもとづいてあるところのそのもの〔乙〕」について，その事物〔甲〕はいっそう優れた意味においていつもあるのだからである」（加藤訳）。

[29] Cf. Aristoteles, *De anima*, 426b9-23; Thomas, *ST* I, q. 1, a. 3, ad 2:「上位の一つの能力ないし習態において共通の対象とされることがらが，下位のいくつかの異なる能力ないし習態において異なる対象として取り扱われることがあっても，これはなんら差し支えない。〔中略〕たとえば共通感覚の対象は「感覚されうるもの」で，それは「見られうるもの」をも「聞かれうるもの」をも自らのうちに包含しているから，共通感覚は一つの能力でありながら五感のすべての対象に及ぶのである」山田晶訳『世界の名著 トマス・アクィナス』（中央公論社，1975 年）。

[30] Leonina 版と Robb 版は cognoscat utrumque，Marietti 版は cognoscat utrumque et apprehendat.

(18) 更に。知性実体（intelligentia）が諸事物を認識していると言われるのは，それが諸事物の原因であるが故に，あるいは諸事物を統治しているが故にである，と『原因論』に述べられている[31]。しかるに，分離した魂は，個々のものを原因するわけではなく，また統治もしてしない。それ故，それらを認識しないのである。

【反対異論】

(1) しかし反対に。命題を組み立てることは知性にのみ属する。しかるに魂は，身体と結合している時でさえ，その主語が個物であり述語が普遍である命題を組み立てる。たとえば，私が，「ソクラテスは人間である」と述べる時のように。このことは，個物を認識し，また個物と普遍との結びつきを認識していなければ，できないことである[32]。それ故，分離した魂も，知性によって，個々のものを認識するのである[33]。

(2) 更に。魂は自然本性的に，あらゆる天使よりも下位にある。しかるに，下位の階序の天使たちは，個々の果の照らし（illuminationes singularium effectuum）を受けるのであり，この点で中間の階序の天使たちと異なっている。中間の階序の天使たちは，これらの果の普遍的な理念（rationes）にもとづいた照らしを受けるのである。更には，最上位の天使たちとも異なっている。最上位の天使たちは，原因であるかたの内に在る普遍的な理

---

[31] *Liber de causis*, prop. 8 et 23.

[32] Leonina 版は quod non *potest* facere nisi *cognosceret* singulare et *compositionem* eius ad uniuersale，Robb 版は Quod non *posset* facere nisi *cognosceret* singulare et *comparationem* ejus ad universale，Marietti 版は Quod non *possum* facere nisi *cognoscerem* singulare et *comparationem* eius ad universale.（イタリックは筆者。異なっている語を示す）

[33] Cf. *QDV*, q. 10, a. 5, arg. 3:「何びとも複合の構成要素を認識するのでなければ，複合物を認識することはない。ところが，「ソクラテスは人間である」というこの複合を形成するのは精神である。というのも，人間一般を把捉しない感覚的能力はそれらのどの能力をとっても，そうした複合を形成することはできないであろうからである。それ故，個別的な事物を認識するのは精神である」山本耕平訳『人間文化研究所紀要』第 7 号（聖カタリナ女子大学人間文化研究所，2002 年）。

念にもとづいた照らしを受けるのである[34]。このように，認識する実体がより下位であればあるほど，その認識はより個別的なのであるから，分離した魂はなおのことはっきりと，個々のものを認識するように思われる。

(3) 更に。下位の能力がなし得ることは何であれ，上位の能力はそれをなし得る[35]。しかるに，感覚は，知性よりも下位の能力であるが，個々のものを認識することができる。それ故，分離した魂も知性によって個々のものを認識することができるのである。

【解答】

解答。分離した魂は個々のものを認識すると言わなければならない。しかし，その全てを認識するのではない。分離した魂は，以前身体と一つになっている時に得た認識のうちの，いくつかの個々のものを認識する。と言うのも，もしそうでなければ，この世でなした事を思い出さないことになり，分離した魂には良心の呵責（conscientie uermis[36]）がないことになってしまうからである。また，分離した魂は，身体から分離した後に得た認識のうちの，いくつかの個々のものを認識する。もしそうでなければ，地獄の火や，地獄にあると言われているその他諸々の物体的な罰に，分離した魂は苛まれないことになってしまうからである。しかしながら，分離した魂は，自然本性的な認識に関する限り，

---

34 Cf. Pseudo-Dionysius Areopagita, *De coelesti hierarchia*, 12, 2; *Liber de causis*, prop. 10.

35 Cf. Boethius, *De consolatione philosophiae*, 5, prosa 4. また，次の箇所も参照。*QDV*, q. 2, a. 6, arg. 4:「ボエティウスの『哲学の慰め』第 5 巻（Prosa 4）によれば，「下位の力のできることは，上位の力もなすことができる」。しかし，彼が同所で語る通り，知性は想像力を超えてその上位にあり，想像力は感覚を超えてその上位にある。それ故，感覚は個物を認識するのであるから，我々の知性も個物を認識することができるであろう」山本耕平訳『人間文化研究所紀要』第 13 号（聖カタリナ大学人間文化研究所，2008 年）。

36 「良心をむしばむ虫」。Cf. *QDV*, q. 16, s.c.:「『イザヤ書』の終りに「かれらの蛆虫は死ぬことがないであろう」と言われ，アウグスティヌスによれば（De civ. Dei XXI c. 9），良心の呵責である良心の蛆虫について解説されている」山本耕平訳『研究所紀要』第 9 号（聖カタリナ大学キリスト教研究所，2006 年）。

全ての個々のものを認識するのではない。そのことは [37]，アウグスティヌスが言っているように，死者たちの魂はこの世で起きていることを知らない [38]，ということから明らかである。

この問題には二つの問題点がある。一つは〔知性的本性に〕共通的なもので，もう一つは〔人間本性に〕固有のものである。共通的な問題点は，我々の知性がただ普遍的なものだけを認識でき，個々のものは認識できないように思われることに起因している。このことから，神と天使と分離した魂に適合する認識能力は知性をおいて他にはないため，個々のものの認識を神と天使と分離した魂が有するということが難しく思われてくるのである [39]。

このため，或る人々は [40]，神と天使たちから個々のものの認識を排除するという甚だしい過ちを犯したのであった。この主張は全くもってあり得ない。なぜなら，もしそうだとしたら，事物から神の摂理が取り去られることになり，また，人間の諸々の行いに対する神の裁きも取り除かれることになってしまう。そして，「天使たちは皆，奉仕する霊であって，救いの遺産を受け取る人々に奉仕するために使わされたのである」という使徒の言葉にもとづいて [41]，人々の救いのために気遣ってくれていると我々が信じている天使たちの奉仕も消し去られてしまうのである。

---

[37] Leonina 版と Marietti 版は ex hoc manifestum est，Robb 版は et hoc manifestum est.

[38] Augustinus, *De cura pro mortuis gerenda*, c. 13 (PL, 40, 605). また，次の箇所も参照。*QDV*, q. 9, a. 6, ad 5:「アウグスティヌスは魂が有する自然本性的認識について語っている。この認識によっては，聖人たちでさえこの地上で起こることを認識することはできない。しかし，彼らはこれらの出来事を彼らが受けた栄光の力によって認識することができる」（山本訳）。

[39] 知性の対象は普遍であり，個物の認識に関わるのは感覚だからである。

[40] Cf. *QDV*, q. 2, a. 5, cor.:「このことをめぐっては多くの誤りがあった。即ち，註釈者『形而上学』第 11 巻（comm. 51）において言及する通り，或る人々は神が個々の事物を認識することを，一般的な仕方での認識を別にすれば，端的に否定した」（山本訳）；*QDV*, q. 8, a. 11, cor.:「別の仕方はアヴィセンナが自らの『形而上学』で主張しているもので，彼は神と天使たちは個別的なものを普遍的に認識するのであって，個別的に認識するのではない，と述べている」（山本訳）。

[41] Epistula ad Hebraeos, 1, 14.

それ故，他の人々は [42]，神も，そして天使たちも，更には分離した魂も，宇宙の全秩序の普遍的諸原因の認識を通して [43]，個々のものを認識するのだと主張した。何となれば，個々の事物のうち，その普遍的諸原因に由来しないものは何もないからである。彼らは次のような例を挙げている。もしある人が，天体と星々の秩序を全て，そしてそれらの動き具合を全て [44]，認識しているとしたら，その人は，将来起きる全ての蝕を，その数も，起きる場所も，起きる時も，その知性によって知るであろう，と [45]。しかしながら，このような知り方は，個々のものの真の認識には不十分である。なぜなら，普遍的なものがいくらたくさん結合されても，それによって個物が完成されることは決してないということは明らかだからである。たとえば，人である，白い，音楽家であるなど，こういうことをいくらたくさん私が言い加えても，個別の人となることはないのである [46]。なぜなら，加えられたこれらのことは全て，多数の人に適合

---

[42] Cf. *QDV*, q. 2, a. 5, cor.:「それ故，他の人々，例えば，アヴィセンナや彼に従う人々は，神は全ての個々の事物を認識するが，個々の事物がそれより産出される全ての普遍的な原因を認識するときに，いわばそれらを普遍的に認識しているのだ，と主張した」山本耕平訳『人間文化研究所紀要』第 13 号（聖カタリナ大学人間文化研究所，2008 年）；*QDV*, q. 8, a. 11, cor.:「別の仕方はアヴィセンナが自らの『形而上学』で主張しているもので，彼は神と天使たちは個別的なものを普遍的に認識するのであって，個別的に認識するのではない，と述べている」（山本訳）。

[43] Leonina 版と Robb 版は totius ordinis uniuersi，Marietti 版は totius ordinis universali.

[44] Leonina 版は et mensuram motus earum, Robb 版と Marietti 版は et mensuram et motus eorum.

[45] Cf. *QDV*, q. 2, a. 5, cor.:「それ故，他の人々，例えば，アヴィセンナや彼に従う人々は，神は全ての個々の事物を認識するが，個々の事物がそれより産出される全ての普遍的な原因を認識するときに，いわばそれらを普遍的に認識しているのだ，と主張した。例えば，天文学者は天球の全ての運動や諸天体の隔たりを認識するとき，次の二百年間に起こってくる全ての喰をも認識するであろう。しかし，いかなる喰をも，田舎の農夫がそれを見ているときにそれを認識しているように，喰が今存在しているとか，存在していないとかを知るような，一種の個別的なものである限りにおいて，それを認識するわけではない。神はこの仕方で個々の事物を認識している，と彼らは主張する。即ち，神はそれらを，いわば，それらの個物の本性において見ているのではなく，普遍的な原因の認識によって見ているのである」（山本訳）。

[46] Leonina 版と Robb 版は nondum，Marietti 版は nunquam.

し得るからである[47]。それ故，全ての原因を普遍的な仕方で認識している人は，決してそのことによって個々の結果を個別に認識しているのではない。同じく，天体の全ての秩序を認識している人は，この蝕をこれとして個別に認識しているのではない[48]。なぜなら，たとえ将来の蝕が太陽と月のどの位置で，どの時刻に起きるのかなど，蝕において観察されることを何でも認識しているとしても，そういう蝕が何度も起きることは可能だからである。

このため，他の人々は[49]，個々のものの真の認識を分離した魂と天使のものとするために，分離した魂と天使はこのような認識を個々のものそれ自体から受け取るのだと主張した。しかし，これは全く不適切である[50]。と言うのも，可知的な存在と可感的な質料的な存在との間には極めて大きな隔たりがあり，そのため質料的事物の形相は，知性によって直ちに受け取られるのではなく，多くの媒体を通して知性へともたらされるのだからである。たとえば，ある可感的なものの形相は，まず，そこにおいては可感的事物の内においてあるよりもより霊的である媒体の内にあり[51]，その後，感覚器官の内にあり，それから表象力（fantasia）へと運ばれ，そして他のより内的な諸力へと運ばれ[52]，そし

---

47 Cf. *ST* I, q. 14, a. 11, cor.:「それゆえ誰かソクラテスを，白いとかソフロニクスの息子であるとか，その他それに似たことがらによって知っている人があるとしても，ソクラテスが「この人間」であるかぎりにおいて認識していることにはならないであろう」（山田訳）。

48 Leonina 版は ut est hec，Robb 版と Marietti 版は ut est hic.

49 Cf. *QDV*, q. 8, a. 9, cor.; a. 11, cor.; q.19, a. 1, cor.

50 Cf. *QDV*, q. 19, a. 1, cor.:「従って，或る人々は，人間の魂は今感覚が媒介となって可感的事物から形象を得ているように，そのときにはいかなる感覚も介入することなしに形象を得ることができるであろう，と述べている。しかしこうしたことは不可能と思われる。何故なら，或る端から別の端へと移行が起こるのは，様々な中間を通してでなければならない。ところで，可感的事物そのものにおける形象は，最高度に質料的な存在を持っているが，知性においては至高の霊的存在を有している。それ故，形象がこうした霊的性格へと移行するのは，何らかの諸段階が媒介となるのでなければならない。即ち，形象は可感的事物においてよりも感覚のうちにより霊的な存在を持ち，さらに感覚のうちによりも表象力においてより一層霊的な存在を持ち，このように相次いで上昇することによって知性における霊的性格に移りゆかなければならないからである」（山本訳）。

51 Leonina 版と Robb 版は prius sit in medio，Marietti 版は prius fit in medio.

52 Leonina 版は ad alias interiores uires，Robb 版と Marietti 版は ad alias inferiores vires.

て最後にようやく知性へと導かれるのである。しかるに，これらの媒体が天使たちや分離した魂に適合するとは，全く考えられない。

それ故，我々は別の主張をするべきである。それによって知性が認識を行う「事物の形相」は，二通りの仕方で事物と関係づいている。すなわち，あるものは「事物を生み出す形相」であり，他のものは「事物から受け取られた形相」である。そして，事物を生み出す形相は，それを生み出すものである限りにおいて，それに応じて，その事物の認識へと導く。それ故，自分の作品に形や素材の配置を与える作者は，その作品の内に作者が原因していることに関する限りにおいて，技の形相（forma artis）によって，その作品を認識するのである。そして，人間の技は決して個体化の原理である質料を原因するのではなく，予めすでに存在している質料を受け取るのであるから，作者，たとえば建築家は，技の形相によって家を普遍的な仕方で認識しているのであり，この家をこれとして個別に認識しているのではない。感覚によってこの家の知識を得るのでない限り，この家を個別に認識してはいないのである[53]。

しかしながら神は，普遍的な理念（ratio uniuersalis）がそれによって得られる形相を産出するのみならず，個体化の原理である質料をも，自らの知性によって産出する。それ故，神は自らの技（ars）を通して普遍的なものと個々のものの両方を認識するのである[54]。また，質料的事物が，神の技によって流出す

---

[53] Cf. *QDV*, q. 2, a. 5, cor.:「ところで，制作者は，制作品を産出するという限りで，自らのうちに有している技術の形相によって制作品を認識している。ところで，制作者は形相のみを産出する。というのは，技術の作品のための質料は自然が準備していたからである。それ故，制作者が自らの技術によって制作品を認識するのは，形相の観点によってのみである。ところで，全ての形相はそれ自体から普遍的である。従って，制作者は自らの技術によって確かに家を普遍的に認識するけれども，この家とかあの家とかは，感覚によって個的な家の知標を獲得する限りにおいてでなければ認識することはないのである」（山本訳）。

[54] Cf. *QDV*, q. 2, a. 5, cor.:「ところで，もし技術の形相が形相を産出しうるように，質料をも産出しうるとすれば，技術の形相によって制作品を形相の観点によっても，質料の観点によっても認識するであろう。それ故，個体化の原理は質料であるから，そのものを普遍的な本性によってのみならず，何らかの個物である限りにおいても，認識するであろう。

ることにより，その固有の本性において存立するのと同様に，可知的事物の似姿もまた，同じ神の技によって知性的諸実体の内に流出するのであり，この似姿によって知性的諸実体は，それらが神によって産出されたものである限りにおいて，事物を認識するのである。そしてそれ故，離在的諸実体は，神の技によって流出し，形相と質料の両方に関して事物の似姿であるところの可知的諸形象が彼らの内に在る限りにおいて，普遍的なもののみならず個々のものをも認識するのである。

「事物を生み出す形相」が，それ自体は非質料的でありながら，形相と質料の両方に関して事物の似姿であることは，不適切なことではない。なぜなら，上位の本性においては，下位の本性におけるよりも常に，より単一化した仕方で（uniformius）ものは存在するからである。それ故，可感的本性においては形相と質料は別のものであるが，より上位であり形相と質料の両方の原因であるところのものは，単一な存在として形相と質料の両方に関係づくのである。このため，ディオニシウスが『神名論』第 7 巻で述べているように [55]，上位の諸実体は，質料的事物を非質料的な仕方で認識するのであり，また，区別されたものを単一化した仕方で認識するのである。

一方，「事物から受け取られた形相」は，ある抽象作用を通して事物から受け取られたものである。それ故，それらの形相は，そこから抽象がなされた元の

それ故，神の技術は形相のみならず，質料をも産出しうるものであるから，神の技術のうちには形相のみならず，質料の類似も存在するのである。従って，諸事物を形相に関しても，質料に関しても認識するのである。それ故，神は普遍的なもののみならず，個的なものをも認識するのである」（山本訳）。

[55] Pseudo-Dionysius Areopagita, *De Divinis nominibus*, 7, 2:「天使達の知性の力とその活動は，不純なものを含まぬ汚れなき純粋さをもって輝いている。そして分かたれず物質と関わらず，神に似た単純さをもって，神についての知を総合している。天使達の知性の力と活動は可能な限り神の超越的な知恵と知性と理性に似せて形づくられているからである。〔中略〕神の知恵は自らを知ることによって万物を知る。物質的なものを非物質的に，分かたれたものを分かたれざる形で，多なるものを一つのものとして，自らの一のなかに万物を認識し，創り出すのである」熊田陽一郎訳『キリスト教神秘主義著作集』1（教文館，1992 年）。

事物に関する限りの認識に導くのではなく，ただ抽象されたことがらに関する限りの認識に導くだけである。それ故，事物から我々の知性の内に受け取られた形相は，質料と質料的な全ての条件から抽象されたものであるため，個物の認識には導かず，ただ普遍の認識に導くのみなのである[56]。これが，なぜ離在的諸実体が知性によって個々のものを認識することができるのか, その一方で, なぜ我々の知性は〔この世で身体と結合している間は〕普遍的なものしか認識できないのかということの理由である。

さて，天使の知性と分離した魂の知性とでは，個々のものの認識に関してそれぞれ状況が異なっている。我々は先の議論において[57]，天使たちの内に在る知性的な力の有効性が，彼らの内に在る可知的諸形相の普遍性と均斉がとれており，そのため，彼らはこのような普遍的諸形相によって，それらの形相が及び得る範囲の全てのものを認識するのだということを, すでに述べた。それ故, 彼らは，類のもとに在る自然的事物の全ての種を認識するのと同じように，種のもとに含まれる全ての個々の自然的事物を認識するのである。

しかし一方，分離した魂の知性的な力の有効性は，流入された諸形相の普遍性とは均斉がとれていない。むしろ，それは，事物から受け取られた諸形相と均斉がとれているのである。だからこそ，魂にとって身体と一つになることは自然本性に適ったことなのである。そしてそれ故, 我々は, 先の議論において[58], 分離した魂は全ての自然的なるものを，それらの種に関してさえも，明確にそして完全に認識することはできず，いわば普遍的で混乱した仕方で認識するにすぎないと述べたのである。従って，分離した魂の内に流入された諸形象は,

---

[56] Cf. *ST* I, q. 86, a. 1, cor.:「然るに我々の知性が認識するのは，既述のごとく，このような質料から可知的形象を切り離し抽象することによってである。だが，個体的質料を離れて抽象されるところのものは普遍 universale にほかならない。だからして，我々の知性が直接的 directe に認識しうべきものとしては諸々の普遍 universalia のほかにはないのである」（大鹿訳）。

[57] *QDA*, q. 15, cor.; q. 18, cor.

[58] *QDA*, q. 18, cor.

分離した魂が天使たちと同じように全ての個物を認識することができるような，そういう認識のためには，適していない。しかしながら，流入されたこのような諸形象は，魂自身の内において，その魂が或る特別な関連性や傾向性を持っている，いくつかの個々のものの認識へと限定されている。たとえば，その魂が苦しんでいるものとか，心動かされているもの [59]，あるいは，何らかの印象や名残りがその魂の内に残っているものなどである。と言うのも，受け取られるものは全て，受け取るものの様態に従って，受け取るものの内において限定されるのだからである [60]。以上のことから，分離した魂は個々のものを認識するが，その全てをではなく，いくつかのものだけであるということの理由は明らかである [61]。

【異論への解答】

(1) 第 1 の論に対しては次のように言わなければならない。この世においては，我々の知性は事物から受け取られた諸形象によって認識を行う。これらの形象は質料とあらゆる質料的条件から抽象されたものである。そのため，その根源が質料である「個々のもの」を認識することはできず，ただ「普遍的なもの」のみを認識する。しかしながら，分離した魂の知性は流入された諸形象を有するのであり，その諸形象によって個々のものを認識することができる。その理由はすでに述べられた [62]。

---

[59] Leonina 版と Marietti 版は afficitur，Robb 版は efficitur.

[60] Cf. *Liber de causis*, prop. 10. また次の箇所を参照： *QDV*, q. 24, a. 8, arg. 6:「さらに，『原因論』（Comm. 10 (9) et 12 (11)）に言われている通り，或るもののうちに在るものは，自らがそのもののうちに在るそのものの仕方によってそのもののうちに在るのである」（山本訳）；*ST* I, q. 89, a. 4, cor.:「けだし，何ものかの受けとられるところのものは，すべて受けとる側の様態に従って或る限定されたものとなるのだからである」（大鹿訳）。Leonina 版と Marietti 版は determinatur in recipiente，Robb 版は est in recipiente.

[61] Leonina 版と Robb 版は patet quare，Marietti 版は patet quod.

[62] 主文を参照（Leonina, u. 280-84）。

(2) 第 2 の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂は，身体と一つになっている間に前もって獲得した諸形象によって個々のものを認識するのではなく，流入された諸形象によって認識するのである。しかし，既に明らかにされたように [63]，だからと言って，分離した魂が全ての個々のものを認識するということにはならない。

(3) 第 3 の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂がこの世で起きていることを認識できないのは，場所的隔たりによって妨げられているからではない。分離した魂の内には，流入された諸形象によって全ての個々のものを認識できるほどの知性的な力の有効性がないからである。

(4) 第 4 の論に対しては次のように言わなければならない。天使たちといえども，未来に起こり得ること（futura contingentia）を全て認識しているわけではない。と言うのも，天使たちは，個々のものがその形象に参与している限りにおいて，流入された諸形象を通して個々のものを認識するのだからである。それ故，未来のことであるが故にまだ形象に参与していないところの未来の事柄は，それらの形象を通しては認識され得ないのである [64]。

---

[63] 主文を参照（Leonina, u. 325-28）。

[64] Cf. *ST* I, q. 57, a. 3, ad 3:「天使の知性における諸々の形象は，これらのもの自身からするかぎり，現在のことがらであれ過去のことがらであれ，また未来のことがらであれ，そのいずれに対しても均等に関わっているのであるが，しかしながら，現在的・過去的・そして未来的なことがらのほうでは，決してそのいずれもが天使における理念 rationes に対して均等な仕方で関わっているわけではない。けだし，現在的であるところのものは，つまり，天使の精神における形象にそれによって自らが類似するごときそうした本性を有するものなのであって，かくして，現在的なるものはこれらの形象を通じて認識される。だが，これに反して，未来的であるところのものは，いまだ，よってもってかかる形象に類似するごとき本性を有しているわけではない。だからして，未来のことがらは，これらの形象を通じて認識されることができないのである」日下昭夫訳『神学大全』4（創文社，1973 年）。また，次の箇所も参照。*ST* I, q. 89, a. 7, ad 3:「時間的に隔たっている未来のことがらは現実態における有 entia in actu ではない。だからそれはそれ自身において可認識的なものではない。ものは存在性 entitas を欠くに従ってそれだけまた可認識性 cognoscibilitas を欠くのだからである」（大鹿訳）。

天使たちが認識できるのは，それらの因において（in suis causis）現存する限りにおける未来の事柄のみである[65]。

(5) 第 5 の論に対しては次のように言わなければならない。自然的な個物を全て認識している天使たちは，それによって個々のものが認識される可知的形象を，個々のものと同じ数だけ有しているわけではない。先の論議で既に明らかにされたように[66]，彼らは一つの形象によって多くのものを認識できるのである。しかし，分離した魂は，個々のものを全て認識するのではない。それ故，分離した魂に関して，この論は成り立たない。

(6) 〔第 6 異論への解答は欠けている〕[67]。

---

[65] Cf. *ST* I, q. 57, a. 3, cor.:「未来 futurum は二通りの仕方で認識されうる。第一には，その因 causa においてである。この場合それが，未来のことがらといえども，その因から必然的に ex necessitate 生起しきたるものであるかぎり，確実な知識 certa scientia でもって認識される。「太陽が明日昇る」というがごときは即ちそれである。だがもし，その因から大抵の場合において ut in pluribus 生起しきたるのでしかないようなことがらであれば，これは確実性 certitudo をもって認識されず，憶測 coniectura をもって認識されるにとどまる。医師が病人の健康を予知するごときが即ちそれである。そして，まさしくこうした仕方こそ，天使の場合に見出される未来のことがらの認識の仕方にほかならないのであって，それは，我々人間における仕方である以上に，（天使はより普遍的に，より完全に諸事物の因を認識するものであるだけに，それだけより多く，）天使たちにおける仕方なのである」（日下訳）

[66] *QDA*, q. 15, cor.; q. 18, cor.:「上位の諸実体においては知性的な力がより強力なため，彼らは少数の普遍的な形相によって，自然的諸事物を最後の種に至るまで認識するほどの可知的完全性を有しているのである。」

[67] Robb 版は，Leonina 版と Marietti 版が第 7 異論解答としている次のテキストを第 6 異論解答としている。 ”Ad sextum dicendum quod species influxa, quamvis sit immaterialis et indistincta, est tamen similitudo rei et quantum ad formam et quantum ad materiam, ut expositum est.”「第 6 の論に対しては次のように言わなければならない。流入された形象は非質料的で不分明なものではあるが，しかしそれは，既に説明された通り，形相に関しても，そして質料に関しても，事物の似姿なのである」（Cf. *QDV*, q. 19, a. 2, ad 2）。Marietti 版は，次のテキストを第 6 異論解答としている。”AD SEXTUM dicendum quod si species essent a rebus acceptae, non possent esse propria ratio singularium a quibus abstrahuntur. Sed species influxae, cum sint similitudines idealium formarum quae sunt in mente divina, possunt distincte repraesentare* singularia; maxime illa ad quae anima habet aliquam determinationem ex natura sua.”「第 6 の論に対しては次のように

(7) 第 7 の論に対しては次のように言わなければならない [68]。流入された形象は非質料的なものであるが [69]，しかしそれは，既に説明されたように [70]，形相に関する限りにおいても，質料に関する限りにおいても，事物の似姿なのである [71]。

(8) 第 8 の論に対しては次のように言わなければならない。それらの可知的諸形相は，確かに事物を創造するものではないけれども，しかし，それらは創造する諸形相に類似している。創造する力を持つことにおいて類似しているのではないが，創造された事物を表出する力を持つことにおいて類似しているのである。と言うのも，工匠は，何かを作る技術を，それを作り上げる力を持たない人にも [72]，伝えることができるからである。

(9) 第 9 の論に対しては次のように言わなければならない。流入された諸形相が神の精神の内に在るイデア的諸理念に類似しているのは，類比的な仕方でしかない。それ故，このような諸形相によってそのイデア的諸理念が完

言わなければならない。もし諸形象が事物から受け取られたものであったなら，それらは，それらがそこから抽象された個々のものの固有の理念ではあり得ないであろう。しかし，流入された諸形象は，神の精神の内に在るイデア的な諸形相の似姿なのであるから，個々のものを判然と表出することができる。とりわけ，魂がその本性から或る限定づけを有している個々のものに関して，そうである。」（* Marietti 版では repraesentari となっているが，Leonina 版と Robb 版の脚注のテキストに従って repraesentare と読む）。

[68] Robb 版は次のテキストを第 7 異論解答としている。"Ad septimum dicendum ut prius." 「第 7 の論に対しても上と同様のことを言わなければならない」。

[69] Leonina 版は sit immaterialis. Robb 版が第 6 異論解答としているテキストでは sit immaterialis et indistincta. Marietti 版が第 7 異論解答としているテキストでは sit immaterialis et distincta.

[70] 主文を参照（Leonina, u. 271-84）。

[71] Marietti 版は次のテキストを第 7 異論解答としている（Leonina 版と異なる箇所をイタリックで示す）。"AD SEPTIMUM dicendum quod species influxa quamvis sit immaterialis *et distincta,* est tamen similitudo rei et quantum ad formam et quantum ad materiam*, in qua est distinctionis et individuationis principium* ut expositum est."「第 7 の論に対しては次のように言わなければならない。流入された形象は非質料的であり判然たるものではあるが，しかしそれは，既に説明されたように，形相に関しても，そしてまた，区別と個体化の原理がそこにおいて在るところの質料に関しても，事物の似姿なのである」。

[72] Leonina 版は ut perficiat illum，Robb 版と Marietti 版は ut perficiat illud.

全に認識されることは不可能である。しかしだからと言って，イデア的諸理念がそれのイデア的諸理念であるところの事物が，それらの諸形象によっては不完全にしか認識されないということにはならない。なぜなら，このような事物は，流入された諸形相に比べてより卓越したものなのではなく，むしろその逆だからである。それ故，それらの事物は，流入された諸形相によって完全な仕方で把握され得るのである。

(10) 第 10 の論に対しては次のように言わなければならない。既に述べられたように [73]，分離した魂において流入された諸形相は，その魂自身の状態に応じて，あるいくつかの個々のものの認識へと限定されるのである。

(11) 第 11 の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂における流入された諸形象は，天使たちを媒介として，神によって原因されるのである。（このことは，或る分離した魂たちが，或る天使たちよりも上位に置かれることを妨げるものではない。なぜなら，今我々は「栄光における認識」について論じているのではないからである [74]。栄光における認識においてならば，魂は天使たちと等しいかあるいは上位でさえあり得るのである [75]。だが今我々が論じているのは，「自然的な認識」についてなのであり，この認識においては，魂は天使に劣るのである）[76]。さて，このような諸形相は天使を介して分離した魂のうちに原因されるが，それは創造という仕方によるのではなく，ちょうど現実態にあるものが，その類に属するものを可能態から現実態に導くような仕方によってである。このようなはたらきは位置的なもの（situalis）ではないため，ここでは位置的にとりもつ媒体を問う必要はない。しかし，自然本性の序列はここで，物体的事

---

[73] 主文を参照（Leonina, u. 328-34）。

[74] 栄光における認識（cognitio gloriae）については *ST* I, q. 62, a. 1, ad 3 を参照。

[75] Leonina 版は angelis uel equalis, uel etiam superior, Robb 版は angelis aequalis vel etiam superior，Marietti 版は angelis vel similis, vel aequalis, vel etiam superior.

[76] Leonina 版のみが，この部分を括弧に入れている。

物において位置の序列がはたらきをなすのと同じ仕方で，はたらきをなすのである[77]。

(12) 第 12 の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂は流入された諸形象によって，それらの諸形象が，先ほど説明された仕方で個々のものの似姿である限りにおいて[78]，個物を認識する。しかるに，この異論の中で言及されている「適用」（applicatio）と「転向」（conuersio）は，このような認識を生じさせるのではなく，むしろこのような認識に伴うのである。

(13) 第 13 の論に対しては次のように言わなければならない。個々のものは現実態として（in actu）無限なのではなく，可能的に（in potentia）無限なのである[79]。だが，天使の知性も分離した魂の知性も，無限の数の個々のものを一つ一つ順に認識して行くことから妨げられていない。なぜなら，感覚もまたこれをなし得るのだからであり，また，我々の知性は無限の「数の種」（species numerorum）[80]をこの仕方で認識するのだからである。と

---

77 「位置の秩序」については *ST* III, q. 90, a. 3, ad 3 を参照。

78 主文を参照（Leonina, u. 271-84）。

79 Cf. *ST* I-II, q. 14, a. 6, ad 1:「個々のことがらは現実に actu 無限たるのではなく，単に可能的 potentia に無限なるにすぎない」村上武子訳『神学大全』9（創文社，1996 年）。また，次の箇所も参照。*ST* I, q. 7, a. 4, cor.:「多はすべて，何らかの多の種に含まれなければならない。しかるに多の種は，数の種にもとづいて成立する。しかるにいかなる数の種も無限ではない。いかなる数も，一を尺度としそれによって測られた多であるからである。それゆえ無限の多が現実的に存在するということは，自体的な仕方にせよ附帯的な仕方にせよ，不可能である。〔中略〕しかしながら，無限の多が可能的に存在することはできる。そもそも多の増大は，大きさが分割されることに伴って起きる。じっさい物が分割されればされるほど，その結果として多数のものが生じてくるのである」（山田訳）。

80 「数の種」（species numerorum）に関しては次の箇所を参照。ST I, q. 5, a. 5, cor.:「なぜなら種を表示する定義は，哲学者が『形而上学』第八巻において述べているように，数に似たものであって，一を加えたり引いたりすることによって数の種が変わるように，定義においても種差を加えたり引いたりすることによって種が変わるからである」（山田訳）；*ST* III, q. 10, a. 3, ad 3:「じっさいこのことが，数の「種」の場合には起こることを，われわれは見る。すなわち，偶数の「種」は無限であり，同様に，奇数の「種」も無限である」山田晶訳『神学大全』27（創文社，2001 年）。

言うのも，認識において無限は，継次的な仕方で，また，可能態のものの現実化に即してのみ存在するからである[81]。自然的諸事物において無限が存在するとされるのも同様である[82]。

(14) 第 14 の論に対しては次のように言わなければならない。アウグスティヌスが言わんとしていることは，物体と物体の似姿は知性によって認識されないということではない。彼が言わんとしているのは，知性はその「見ること」（uisio）において，感覚のように物体によって動かされるのではなく，また表象力（ymaginatio）のように物体の似姿によって動かされるのでもない。知性は可知的真理によって動かされるのだということなのである。

(15) 第 15 の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂は身体と結合した魂と同じ本性を有するのであるが，身体から分離したことにより，上位の諸実体へと向かう開放された視野（aspectus）を持つのであり[83]，それによって上位の諸実体を通して可知的諸形相の流入を受けることができ，その諸形相によって個々のものを認識するのである。これは，前の論議において明らかにされたように[84]，身体と一つになっている間はできないことである。

(16) 第 16 の論に対しては次のように言わなければならない。個物は，可感的なものである限り，すなわち物体的な変化に服するものである限り[85]，決し

---

[81] Cf. *ST* I, q. 86, a. 2, cor.:「質料的事物においては現実態における無限は見出されず，却ってただ可能態における無限，つまり一つのものが他のものに継起してゆくかぎりにおける無限が見出されるにすぎないものなること，『自然学』第三巻にいうごとくである。かくして，我々の知性にあっても，無限はやはり可能態において，つまり一つのものを他のものに続いてとってゆくというかたちにおけるものとして見出されるのでしかない」（大鹿訳）。

[82] Leonina 版は in rebus naturalibus，Robb 版と Marietti 版は in rebus materialibus.

[83] Cf. *QDA*, q. 17, cor. (Leonina, u. 117); q. 18, cor. (Leonina, u. 328).

[84] *QDA*, q. 15, cor. (Leonina, u. 407).

[85] Leonina 版と Robb 版は secundum corporalem mutationem，Marietti 版は secundum corporalem immutationem.

て可知的なものとはならない[86]。しかしながら，既に明らかにされたように[87]，非質料的な形相がそれを表出し得る限りにおいて[88]，可知的なものとなるのである。

(17) 第 17 の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂は自らの知性によって，上位の実体と同じ仕方で可知的諸形象を受け取るのである。上位の実体においては，人間が二つの力によって，すなわち感覚と知性によって認識するものが，一つの力によって認識される。それ故，分離した魂は両方を認識することができるのである。

(18) 第 18 の論に対しては次のように言わなければならない。分離した魂は事物を統治していないし，原因もしていないが，しかし，原因し統治している者が有しているものと類似した諸形相を有しているのである。と言うのも，原因し統治している者が，原因され統治されているものを認識するのは，それの似姿を有している限りにおいてに他ならないからである[89]。

---

[86] Leonina 版と Robb 版は nunquam/numquam fit，Marietti 版は nunquam sit.

[87] 主文（Leonina, u. 295-303）および異論解答 8 を参照。また次の箇所を参照。*QDV*, q. 19, a. 2, ad 2:「離在的魂が，それによって個々の事物を認識する，それら形象はそれ自体においては非質料的で，従って普遍的でもあるけれども，しかしそれらは普遍的な本性に関しても個別的な本性に関しても事物の類似である。従って，それら形象によって個々の事物が認識されるのは何らさしつかえのないことである」（山本訳）。

[88] Leonina 版は forma immaterialis, Robb 版は forma immaterialis vel intelligibilis, Merietti 版は forma immaterialis intelligibilis.

[89] Cf. *QDV*, q. 19, a. 2, cor.:「神の精神のうちに存在するイデアは形相と質料の両者に関して作出しうるものであるから，それらイデアは形相と質料の両者に即して諸事物の範型であり，類似でなければならない。それ故，それらイデアによって事物は形相的な諸根原に関連して取られる類と種との本性によってのみならず，質料がその根原である事物の個別性によっても認識されるのである。ところが，天使の精神と同時に創造される形相と魂が身体から分離されるときに獲得する形相は神の精神のうちにある，かのイデア的諸理念に何らか類似したものである。従って，それらイデアから事物は形相と質料のうちに自存するために流出してくるように，形相に関しても質料に関しても，即ち普遍的本性に関しても個別的本性に関しても諸事物を認識しうる被造の精神のうちに形象が流出するのである。従って，このような形象によって離在的魂は個別的なものを認識するのである」（山本訳）。

【反対異論への解答】

更に，反対異論に対しても答えなければならない。なぜなら，その主張に誤りがあるからである。

(1) 第 1 の論に対しては次のように言わなければならない。身体と結合している魂は，直接的にではなく，一種の立ち帰り（reflexio）によって，個々のものを認識する [90]。それはすなわち，自らの可知的対象を捉えることを通して，自らの活動を考察することへと立ち帰り，その活動の根源である可知的形象へと立ち帰り，そしてその形象の源へと立ち帰る [91]，という仕方によってである。このようにして魂は，表象像の考察と，表象像がそれの表象像であるところの個々のものの考察へと至るのである。しかるに，この立ち帰りは思考力と表象力が結びつくことによってでなければ成し遂げられないが，これらの力は分離した魂の内には存在しない。それ故，分離した魂はこの仕方で個々のものを認識するのではないのである。

---

[90] Cf. *QDV*, q. 2, a. 6, cor.:「我々の知性は，それが受け取る形象から，直接的には表象像を認識することへ導かれるのではなく，表象像がそのもののそれであるそのものを認識することへと導かれるのである。しかし，知性がその働きの本性，それによって認識する形象の本性，そして最後に，形象をそれより抽象するそのもの，即ち，表象像の本性を考察するとき，一種の立ち帰りによって我々の知性は表象像そのものの認識にも戻っているのである」（山本訳）；*ST* I, q. 86, a. 1, cor.:「我々の知性が質料的な諸事物において直接のそして第一なる仕方で認識するところのものは，個々のもの singulare ではありえない。〔中略〕我々の知性が直接的 directe に認識しうべきものとしては諸々の普遍 universalia のほかにはないのである。ただし，間接的な indirecte そして一種の「立ち帰り」reflexio ともいうべき仕方においてならば，それは個別 singulare をも認識することができる。けだし上述のごとく，我々の知性は，可知的形象を抽象したのちといえども，可知的形象をそのうちにおいて認識すべき表象 phantasmata へ自らを向けることなしには，その可知的形象に従って現実的に認識することができないのであって，この点，『デ・アニマ』第三巻に説かれているごとくである」（大鹿訳）。

[91] Leonina 版は eiusdem speciei originem，Robb 版と Marietti 版は ejus/eius speciei originem.

(2) 第 2 の論に対しては次のように言わなければならない。下位の階序に属する天使たちは個々の果の理念（rationes）についての照らしを受けるが，それは個々の形象によってではなく，普遍的な理念によってである。この普遍的な理念から彼らは，その知性的な力の有効性の故に，個々のものを認識することができるのであり，この点で分離した魂に優っている [92]。そして，彼らが受け取るこの理念は，端的に言えば普遍的なものなのであるが，より上位の天使たちが受け取る，より普遍的な理念との比較から，個別的なもの（particulares）と言われるのである。

(3) 第 3 の論に対しては次のように言わなければならない。下位の能力がなし得ることは，上位の能力もなし得る。ただし，同じ仕方でではなく，より卓越した仕方でなし得るのである。それ故，感覚が質料的にそして個々に捉える，その同じ事物を，知性は非質料的にそして普遍的に認識するのである。

以上

[92] Leonina 版と Marietti 版は in qua，Robb 版は in quo.